

に登り大坪君の熱誠を込めた説明に一同感激を深くした。山を下り更に引返し水師營會見所に向ふ。

水師營會見所に於て旅順開城の當時を追想し旅大裏道路により農村の收穫、林檎園の紅玉を賞し大連に歸着す時に午後6時。

通俗講演會

主催、日本鐵鋼協會、滿洲術技協會、後援、大連市役所、滿洲日報社。

會場、大連市東公園町滿鐵協和會館。

午後6時已に聴衆400名に達するの盛況にて大講堂平場大部分席を充すに至る。所定の如く開會し大連市長不在のためプログラムを變更し滿洲技術協會會長貝瀨謹吾氏により開會の辭を述べらる。次で野田博士、齋藤博士、伍堂博士の順序にプログラム所定通りに進め午後9時講演を終り映畫に移る。八幡製鐵所作業實況二巻を映寫し荒川技師により説明され一同製鐵製鋼作業の豪快なる實況を觀賞する。9時30分終了し長谷川實行副委員長の閉會の辭にて大成功裡に散會した。本夕の盛況は豫て關係者の宣傳努力宜しきによるものとは云へ大連中流智識階級者の向學常識慾の盛なる事を示す反映と云はねばならぬ。

通俗講演會開會の辭

滿洲技術協會々長 貝瀨謹吾君

本日茲に日本鐵鋼協會と我滿洲技術協會との合同主催、大連市役所及び滿洲日報社後援の下に鐵と鋼に関する通俗講演會を開會するに當り、主催者を代表して一言挨拶を申述ぶる事を光榮とするものである。

日本鐵鋼協會は創立以來既に二十年の久しき歴史を有し、其間日本工學會の一構成機關として學界に多大の貢獻をしたのみでなく我國製鐵製鋼の業界に亦甚大なる功績を積まれたのである。今回滿洲冶金學會と聯合して當地に講演大會を開き、其研究蘊蓄を發表すると共に、兼て新興滿洲國の資源及び工業を視察さるゝため多數有力なる會員が來滿されたのである。本大會の結果は必ずや我滿洲の斯界に相當大なる寄與を齎さるゝ事と信じ誠に慶賀に堪へない。殊に我々多年滿洲に在て綜合技術の活用に微力を致しつゝある者には一層の力強さを感じるものである。

現代は何と云つても鐵の世界である。即ち重工業及び國防工業の基礎は凡て製鐵製鋼にある。従て鐵の需給關係は國家經濟に最も重要なものであり。我々國民として常識的に當然鐵鋼に對して充分なる認識を持たねばならぬ。今夕の此集りは蓋し此意味から催されたものである。今少しく實際の數字に就て見るに、大正元年より昨昭和8年迄22年間に日本國內に生産した鋼材鑄鐵を合せて約60億圓、之に海外より輸入した鉄鑄、鋼材、機械其他製品の鐵部分を併せ約40億圓となり合計100億圓に上つて居る。之を見るも鐵及び鋼が國家の存立上に重大なファクターであるかを知るに足る。尙世界鐵鋼事業は開關以來のレコードと稱せらるゝ1929年即ち昭和4年の生産額を100として昨年を生産額を見るに鉄鑄に於て米、英、佛、獨は30乃至60に減じて居るに日本は131を示し、鋼材に於ても各國が4乃至70に下つて居るのに、日本は133となつて居る。之に依て見るに我國の製鐵製鋼事業が最近異常なる發達の途上にある事がわかる。然しながら此指數に表はるゝ實際の使用數量は各國に比し遠い隔りがある。即ち米國が昨年使用した鋼材は約2,000萬噸に上り其中自動車工業のみに使用した鋼材が約400萬噸であるのに、同年我國の使用した鋼材の全部は300萬噸に過ぎない。之を以て見るに我日本の工業は未だ以て誇る事は出来ないと云ふ。蓋し

所要原料の多くは海外から輸入せねばならぬ關係にある事は遺憾である。然るに滿洲の天地は其事情一變し建設されたる滿洲國と我國とは異體同心の關係にて共存されて居る。而も滿洲國內には貧乏ながら多量の鐵鑄が埋藏されて居る、石炭も亦必要なものが多量に産する。日本内地には主要製鐵所が大合同して日本製鐵會社となり、滿洲には昭和製鋼所や本溪湖煤鐵公司の活躍が之と相對で、茲に日滿兩國の鐵鋼自給自足が確定するものと信ずる。製鐵製鋼の殷盛と附隨して附帶工業の發展がめざましきもの有る可く誠に喜びに堪へない。今夕の野田、齋藤、伍堂三先生は孰れも斯界の最高權威者なるが故に、以上の如き重要な諸問題に就ても詳細示教せらるゝ事と信ずる。

世の諺に「景氣は鐵から」と云ふ。我々は日滿兩國の爲に製鐵業の發展を慶祝すると共に今日の此集りを祝福するものである。本日は秋晴の好日和、日曜の行事と種々多かつたであらうに定刻已に斯の如く多數の來會を得た事は、主催者として大に満足を感じ敬意と謝意を表するものである。何卒引續き最後迄御靜聽あらん事を乞ふ。之を以て開會の御挨拶と致します。

閉會の辭

長谷川副委員長

主催者として長時間御靜聽を煩したる各位に厚く御禮申上ます。茲に御斷り申し上げねばならぬ事は映畫のプログラム變更で、發表して居た伊太利名畫全發聲フィルムは都合により今夕の間に合はず終りに取止めとした事である。

凡そ其國の工業の發達進歩は一般國民の常識向上に基礎を置ける事は明かである。今夕は三先生の有益なる御講演により鐵及鋼に関する豊富なる智識を受入れられた事を皆様と共に歡喜するものがあります。此意味に於て皆様の智識慾の旺盛はやがて一層我製鐵製鋼業の殷盛に向ふ素因となる事と信じます。茲に御垂教の勞を取られた講師三先生に滿腔の感謝の意を表して閉會と致します。

第2日(10月8日、月曜、快晴)

講演會 午前8時よりヤマトホテル一階東廊下に受付を開始し出席者の整理、印刷物配布、講演其他の準備に執掌した。所定の準備室には會員及び講演者詰掛け係員は忙殺して居る。當日は實行委員以外に補助員を配置した。受付係、後藤、名黒、森永の三氏、圖表係、原、伊澤の兩氏、時計係大日方、日下兩委員等の分擔による。講演場は準備室に隣るダンスホールを充て東側ステージを演壇とし壇下左側に司會者、時計係、記録係の席を、右側に會長及び委員長の席を設け、聽講者席は長卓子は白布を覆ひたる間に椅子を配し總計130を定席とした。

定刻9時より所定の講演會に移る。

開會の辭 大會委員長工學博士伍堂卓雄君(要旨別項)次で河村前會長の司會により直に講演に移る。

- 講演番號 1、本溪湖低磷純(純鉄)の製造に就て
本溪湖煤鐵公司製鐵科長 工學士 井門文三君
同 2、昭和製鋼所の高爐設備及作業に就て
昭和製鋼所鉄鑄部 工學士 淺輪三郎君
同 3、銻鑄の壽命と操業法
日本製鐵會社兼二浦製鐵所 工學士 松本與三郎君
10分間休憩、

午前11時より鮫島副委員長司會の下に講演を續行さる。

- 講演番號 4、八幡製鐵所に於ける銻鑄爐瓦斯の利用に就て
日本製鐵會社八幡製鐵所 白石幾次君
同 5、酸性及鹽基性平爐製鋼に伴ふ熔滓の粘性變化に就て

大阪帝國大學助教授 工學士 松川 達 夫君
(齋藤大吉博士代講)

午前 11 時 45 分講演を終り香村賞牌贈呈式に移る。

香村賞牌贈呈式 午前 11 時 45 分

先づ香村賞牌受領者並に賞牌及び表彰狀、受領者推薦理由書等の印刷物を配布し、壇上大卓子を前に野田會長より嚴肅なる式辭を述べられ(式辭別項)。次で梅根博士を壇上に招かれ表彰狀及び賞牌を贈呈さる。(一同拍手)。視電披露。

日本鐵鋼協會大會を祝し併て賞牌受領者梅根君に敬意を表す 香村小録。

贈呈式後一同ホテル前大玄關階段に集合し記念撮影を行ふ。時に 12 時。

晝食 大連市役所の招待にて出席者全員ホテル大食堂に會食す。市助役岡野氏より挨拶あり野田會長謝辭を述べらる。

午後 1 時 講演開始

司會者。京都大學教授 西村秀雄氏

講演番號 6、電氣製鋼實驗的研究

三菱重工業會社社長崎造船所 工學士 中村 道 方君

同 7、歐米に於ける傾注式平爐及其作業と八幡製鐵所に於ける現況

日本製鐵會社八幡製鐵所 工學士 松原 武三郎君

同 8、鑄鐵の鑿に就て 新潟鐵工所 松浦 春吉君

同 9、高温高壓氣罐用鋼管の腐蝕に就て

住友伸銅鋼管會社 絹川 武良司君

質疑。唯今の講演中酸化鐵と申されましたが其意味は(藤原氏)回答、明確に御答へ出来ませぬが $FeO \sim Fe_3O_4$ の意です。

10 分間休憩。水谷理事の司會により繼續開會さる。

講演番號 10、ニッケル合金鋼の鍛鍊上考慮を要すべき二三の點に就て 日本ニッケル情報局 藤原 唯義君

同 11、佐々川清君の講演は都合により本人より取消された。

同 12、銅、アルミニウム、珪素三元系合金の平衡狀態圖に就て(西村秀雄氏代講)

京都帝國大學工學部探鑛冶金學教室 工學士 久恒 中陽君

同 13、デュラルミンの時効硬化の一時的中止に就て

三菱重工業會社名古屋航空機製作所 工學士 池田 傳君
豫定より時間餘り 15 分間休憩す。午後 4 時齋藤博士の司會により講演を繼續す。

講演番號 14、マグネシウム、カドミウム系を基礎とする多元系輕合金の研究

旅順工科大学教授 工學博士 大目方 一司君

滿洲化學工業株式會社 萩谷 正巳君

(大目方君講演)

同 15、鋼の低温脆性に就て

日本特殊鋼會社々長 工學博士 渡邊 三郎君

同 技師 永澤 清君

(永澤君講演)

所定の講演全部を終了す。次で午前中に行はれた香村賞牌受領者梅根博士より會に對する答辭を述べられた(別記)。

野田會長登壇され閉會の辭を述べられ茲に本日の講演大會全部を終了する事を得た。時に午後 5 時。會員の着席を乞ひ大連以北地見

學旅行に關し必要なる注意と希望等 20 分間に涉り鞍山實行委員水津氏より述べられた。

本日大會出席會員實數。

合計出席者 89 名。内譯 内地會員 46 名、朝鮮會員 3 名、滿洲會員 40 名。滿洲會員中純滿洲冶金學會々員 11 名、日本鐵鋼協會及び滿洲冶金學會共通會員、27 名 日本鐵鋼協會會員 2 名、第 4 日以後奥地見學に参加を申込める滿洲冶金學會會員 5 名。

講演大會開會の辭

大會實行委員長 伍 堂 卓 雄君

要旨。日本鐵鋼協會は第十三回講演大會を滿洲に於て開催さるゝ事となり、滿洲冶金學會は之と聯合して第七回の講演會を開く事となり本日豫定通り開催するは慶賀の至りであります。鐵鋼協會長初め多數の會員諸氏は遠隔の地に奮つて御參會下され、當春決定當時は内地よりの出席者 37 名の豫想の由本部からの通知を受け其積りで各委員は準備を進めて居ました處、次々に申込者増加しまして出席名簿にあります通り内地より 50 名に達し滿洲、朝鮮を合して總計 106 名の多數に達しました。又本日は會員以外の方も傍聽され此會場 130 の席が満員するの盛況となりました事は一に會員諸氏の滿洲視察の熱心による事と鐵鋼に關する學問技術に關し御熱心の致す處と存じます。實行委員に於ては不慣のため諸事不行届の事と思ふが御不滿の點は御寛容の事を前以て私から御願ひ申す。又明日より各地の見學に移る筈であります之亦多數の御方に不自由の感を起さるゝ場合もあります事と思ひます。又現在の滿洲は已に完成せる事業もありますが未だ建設の中途にあるとか或は計畫中に屬するものも少くない。特に私の關係して居る昭和製鋼所の如きは創立工事中で雜然として大して御目にかくる程のものはないかも知らぬ。斯様な狀態の滿洲を御覽になる事は諸君に取ては寧ろ好都合であると思ひます、何故なれば皆様は夫々其道の専門家で技術學問の經驗家であるゝからである。昨夜私は通俗講演會に於て日滿經濟の統制に就て述べましたが之は皆様の御批判を仰ぎたい積りである。明日から見學さるゝに就ては日本と滿洲と云ふ意味で御視察下されん事を希望致します。

時間を費して講演時間を空ふする事は恐縮ですから之から直に講演に移ります(拍手)。

香村賞牌贈呈式、式辭

野田 會長

工學博士梅根常三郎君は明治 44 年京都帝國大學理工大學探鑛冶金卒業後直に八幡製鐵所に就職、大正 8 年滿鐵鞍山製鐵所創設に際し聘せられ同所技師として勤務し同 9 年 1 月より同所原料の根本問題たる貧鐵鑛處理研究を始むるや君は之が主班となり各種の研究をなし同 12 年末に至り漸く完成鞍山今日の選鑛工場建設の基礎をなせり。

抑も鞍山の貧鐵鑛は其含鐵分漸く 37% にして夾雜物は殆ど珪酸なり故に其儘原料とすれば技術的には可能なるも經濟的には採算不能にして是非共選鑛せざれば數億噸の貧鐵鑛開發の途なかりしなり。嘗て此の貧鐵鑛は鑛粒極めて微細且つ非常に硬堅にして加ふるに大部分は赤鐵鑛の形として存在するを以て普通の選鑛方法を以てしては處理不可能なりしを同君は數年にわたり磁化焙燒に就き研究をなし各種の困難に逢着せるもよくこれを克服し今日の基礎をなしたり。此方法たるや未だ世界に其類例なくよく之を完成せるは滿洲に散在